

くまのはなし あれこれ

かれこれ 37 年も前のこと、初めての転勤で福岡に転居することになった。家族帯同で転居し、居を構えたのは七隈（ななくま：現在の福岡市城南区七隈）という町。博多駅から西鉄バスで南西へ 35 分、油山を背にした福岡市の中でも郊外と言えるような景色の所だった。

福岡県を中心に九州北部に「隈」という字を使った地名が大変多いのでいささか興味を持った。我が家がある七隈の他に、金の隈（かねのくま）・干隈（ほしぐま）・月隈（つきぐま）・田隈（たぐま）・雑餉隈（ざっしょのくま）・道隈（みちくま）・吉隈（よしくま）・赤隈（あかくま）などなど数え始めたらきりが無い位に存在する。地図を眺めていけばいくつでも見つかる「隈」の字。

「隈」という言葉の意味は、「入り込んだ場所、奥まった隅っこ」を意味し、「濃い色と薄い色が接する所」を言う意味もあり歌舞伎役者の「隈どり」はそこから来ている。国語的にはこんな情報が得られるが、「隈」が付く地名は、川の流れが大きく屈曲しているところや尾根の入り組んだ谷になるような所に数多く存在するらしい。また、阿武隈川・千曲川などの例を考えると、単純に九州北部だけに存在する地名とは言い切れないようだ。

<1> くまのはなし その1

数ある「隈」の地名の中で一番早く知ったのが「雑餉隈（ざっしょのくま）」。高校三年の時に親友と一緒に九州一周の旅行をした。この時に鹿児島本線の車窓から雑餉隈と言う何とも難読難解な駅名を体験した。

「餉」の字は、朝餉夕餉という言葉があることから食べ物に関係しそうな感じは想像できた。後にこの駅は南福岡に改称されてしまい、由緒ある「雑餉隈」という駅名は今では西鉄天神大牟田線に残るのみとなってしまった。実際に福岡に住んで見てわかったのだが、古くからあるこの地の名前「雑餉隈」は長くて言いにくいせいか、殆どの人が「ざっしょ」と略して言っていた。

雑餉隈という地名の起源が気になって調べて見たら、大宰府に勤める「雑掌（ざっしょう）」という職につく人が居住する所だったことから「雑掌隈」となり、それが変形したという説が有力のようだが、確かではないらしい。西鉄の雑餉隈駅と春日原（かすがばる）駅の間の、線路と御笠川に挟まれた一帯が昔の雑餉隈で、今では別な町名になってしまい隣接する大野城市側に雑餉隈町という町名が残っているのみとなって



しまった。また、現在の御笠川の流れを見ると、福岡空港の南端付近でいくつかの屈曲があり、その岸に月隈・金の隈という地名をうかがうことができる。それより南側（上流）では屈曲などいささかも感じられないが、春日原付近で牛頭川を合するこの川は豪雨の時には氾濫して川の流路は頻繁に変化を繰り返してきたのかもしれない。

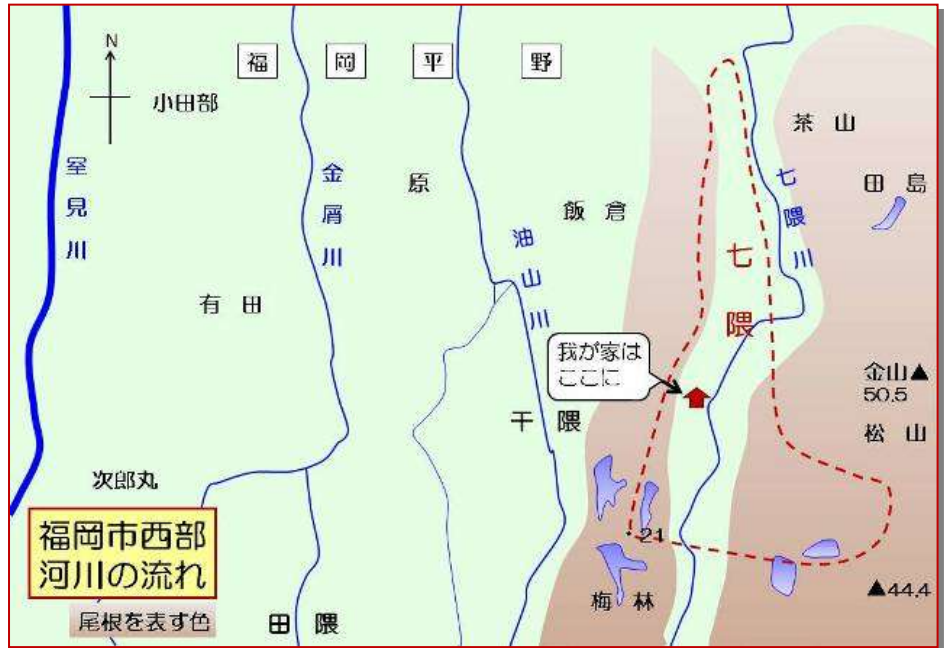
<2> くまのはなし その2

我が家が居を構えて四年間住んだ「七隈」という町、地名の由来はどんなことなのだろうと興味を持った。「七つの隈がある地形」なのだろうと思って、それ以上詳しく調べて見る時間がなく通り過ぎてしまった。「七つの隈」ってどこにあるのか？ 近所を流れている川はそんなに屈曲していただろうか？ などなど気になることが浮上してきたので、昨年12月の福岡の旅を機に調べて見ることにした。

我が家の東側には七隈川が流れていたが、治水事業によりすでに三面張りが施された状態だった。水源は福岡市の顔と言われている油山（海拔 597m）の中腹にある。西岸は 10 分も歩かぬうちに上り坂になり、福岡平野に向かって海拔 10m~20mの緩やかな傾斜の尾根が裾を引き、間もなく平野に吸い込まれる寸前のよ

うな場所。川に沿って住宅地が広がりはするが、随所に名残の水田や畑が見られる所だった。七隈川の対岸には住宅公園の金山団地があり、その名の通り開発前は山だったようで海拔 50.5mの三角点も残っている。こちらの尾根は幅も広く北の福岡平野に落ちる前に茶山という膨らみがある。

古くからあり今でも残っている地名の中から地形を感じさせるものを選んでプロットして見たら右図のような地図が出来た。そしてその中で「隈」が付く地名をもう少し深く考えて見た。



「七隈」は七隈川、「干隈」は油山川、「田隈」は金屑川とそれぞれの川の岸に存在するので、川との関わり合いを感じることができる。また、いずれの地名も南側の佐賀県境の稜線から下りて来た尾根の付け根にあり、尾根の入り組んだ所にある地名という説明とも合致するような気がする。

福岡市営地下鉄七隈線の各駅には、その駅をイメージしたシンボルマークが設定されている。電車が駅に停



まるごとに窓から見える駅名表示を見るのが楽しい。七隈駅のシンボルマークは丸の中に六角形が 7 個配置されたもので、何やらその意味が気になる模様だった。(左図)

地下鉄路線案内の資料を見ると、この地の地名の由来「七車 (ななくるま)」によるものと説明があった。頭の中では「七つの隈」を想定していたので驚きの説明だった。

その昔、大宰府に向かう力車の車夫が多く住んでいて往来を車が頻繁に行き来していたのが起源で、「七車 (ななくるま)」と呼ばれていた。駅のシンボルマークは「七つの車」

をイメージしたものとのことだった。

一方、地形の特徴から地名が付いたことを起源とする説も興味深いので少々深入りして見た。

「奥まった低湿泥地」を「ひじ」「くま」と呼んでいたことから、「ひじくま」と呼んでいたのが転じて、「ひじ」に「七」をあてるようになり、後の世に「ななくま」と読むようになったという説明があった。関東地方で言えば「やと (谷戸)」「やつ (谷津)」「谷 (やつ)」などがこれに相当するものだろうと思う。古い地図・地形から地名の起源を探ろうという研究をしている方が書いた書籍に載っていた。著者の説明によれば、古来日本の地名は「地形の特徴」から名が付き、後に「読みやすい音に変形」したり漢字があてられる時に「美しい響きの文字をあてる」などの変形を繰り返してきている事が多いという。

例えば、山あいには田圃があるので「やまた」と地名が付いたが、後の世で漢字があてられたら「矢又」となってしまう。「山田」のイメージはどこかへ消えてしまいかねない。さらに近代に入って「矢又村」が隣の「山崎村」と合併して「矢崎町」に改名すると、もう表面的には起源が読みとりにくい地名になってしまう。

いずれの説も信じたくなるような興味深い話であるが、どうやら正確な起源は不明らしい。
我が家は七隈川を前に置き、油山川と七隈川の間小さな尾根を背にした水田地帯が宅地開発された所にあ
った。西に向かって坂を上って尾根を越えると飯倉という比較的大きな町があり、近道として随分活用した。
小さな尾根とはいえ細かな谷がきざまれており、麓の一部には今でも水田が残っている。自分で住んで見て
の印象からすると「七つの隈」説は解りやすいし捨てがたい。

識者の研究資料から得た情報を時系列で並べて見ると

大宰府が存在したのは西暦 600 年代もしくはそれ以前と言われているが、機能（力）を失った時期と存在が
消えた時期となるとこれまた諸説あるようで、その長い期間のどの時期に「車引き」が走りまくったのかは
よくわからない。鎌倉時代末期（1330 年頃か）の文書に「七隈郷」と記載があったと言われ、天文年間（1532
年～）の資料に「七車」とあった。そして慶長年間（1596 年～）の検地資料にも「七車」と表記されている。
素人が口出しする程に簡単なテーマではないことがわかったので、適当なところで閉幕とすることにした。
しかしながら、どの土地へ行っても「その土地の名の由来」は気になるし、限りなく面白い。

以上

◆参考文献・参照資料等

コンサイス日本地名辞典

(三省堂)

地形から読む 筑前の古地名・小字

(池田善朗著・石風社)

福岡市営地下鉄路線説明資料各種

福岡県の歴史に関する文献各種

国土地理院地形図